

## 4. 研究所設立の頃

### 4.1 思い出すままに

大桃 洋一郎

財団法人 環境科学技術研究所 元理事長

現職：公益財団法人 環境科学技術研究所 顧問



六ヶ所村に研究所を開設したのは1990年12月3日である。旧日本原燃大石平分室の食堂あとを改装して現地仮事務所とし、廃校となっていた鷹架小学校の音楽室に放射線測定器を持ち込んで、仕事の準備に取り掛かった。

職員について：設立当初の人員は、森茂理事長他6名、その内訳は旧日本原子力研究所（以下原研）からの派遣2名、旧動力炉核燃料開発事業団（以下動燃）からの出向者1名、旧国立放射線医学総合研究所の途中退職者2名、現地採用者1名であった。現役の研究者は事実上零だったが、翌1991年4月から、上記研究所からベテランの出向者が若干名加わった。

職員宿舎について：全員六ヶ所村に住む予定であった。しかし村内に借り上げ住宅などの受け入れ態勢が整っていなかったため、当分の間隣接の三沢市または野辺地町に住居を探すことになった。しかし1人か2人は当初予定通り六ヶ所村に・・・という意見も強かった。余談だが当時吉幾三作詞作曲の「俺ら東京さ行くだ」が流行していた。その歌詞の一部に「テレビもねえ、ラジオもねえ、車もそれほど走ってねえ」というフレーズがある。それと有名なランプの宿青荷温泉のイメージが重なって、六ヶ所村に住むことになれば、部落によってはランプ生活を覚悟しなければという思いが、一瞬みんなの脳裏をかすめたのではないかと思う。事実、他社の話だが、家族から電化製品が使えないのかと言う問い合わせが何件もあったという。

改めて振り返ってみると、当時、職員の日常生活等に関する情報提供は不十分だったのではないかと思うが、自然に笑みがこぼれるような、暖かなエピソードではある。

研究所建設予定地周辺の状況等について：建設予定地の中を熊の親子が散歩する姿を見掛けたことがあった。冬は鷹架沼が凍結するのを待って、ワカサギ釣り、春は蕨、昼休みのほんの1時間足らずのうちにワカサギ20匹ほど、蕨一抱えの収穫があった。自然豊かな明るい、楽しい土地だった。

冬のバス通勤と雪：六ヶ所村では、降り積もった雪が強い海風にあおられて舞い上がる。雪は下から降るのだ。道が凍結すると緩やかな坂道でも途中で停車したら再発進は極めて困難。大雪で倒木が道をふさいだこともあるが、通常なら1時間のところ、3時間かかったこ

とがあった。

ここで雪と敷地面積に触れておきたい。建屋の面積に対し敷地面積が広すぎるといふ指摘を受けることがあった。都会でも雪が降れば分かるが、除雪した雪の捨て場を確保しないと大変なことになるのだ。三沢市内でも屋根から落ちた雪の捨て場がないので、放置しておいたら、ストーブの排気ダクトが雪に埋もれ、人身事故になるおそれがあった。実際に生活してみないと分からないことがあるものだ。

人々との親睦：職員の数が少なかったころは、旅費を積み立て、一泊二日の職員親睦旅行があった。分野の異なる職員間の相互理解に役立った。設立初期に理化学研究所の研究者だった荒谷美智さんが、当研究所の職員として着任され、六ヶ所村内に「読書愛好会」を立ち上げ、村民との親睦と相互理解に努められ、特筆すべき大きな貢献をされた。

国際検討委員会について：研究所立ち上げの時から国際的な研究活動を意識していた。放射性物質の環境中での挙動や生態系（人を含む）への影響に関する実証的研究を実現しうる施設の整備や研究課題について世界各国の第一人者を招待し、議論を重ねた。当研究所の活動は国際放射生態学連合（IUR）の注目するところとなった。

#### 閑話休題

ここで青森のねぶたに触れておきたい。1991年の夏、職員親睦会でねぶた見学に出掛けた。歯の根が合わぬほど寒かった。青森初めての夏祭りだったのに、寒さにふるえたことだけが記憶に残っている。

設立当時の思い出は尽きない。懐かしさに胸が締め付けられる思いである。涙が止まらない。

最後に一言。繰り返し強調したように、この研究所は排出放射性物質の環境中での挙動、生態系への影響、更に人体への影響を実証することを目的に建設された世界でも類のない研究施設である。例えば雪を降らせ、「やませ」を再現できる全天候型人工気象実験施設、建設当初「月面基地」で人々の関心と呼んだ生態系実験施設（例えば月面でも人間が一定期間自給自足しながら生活できる機能を持つ施設）、生物の個体から、細胞、遺伝子レベルまで放射線影響を実証研究できる諸施設—低線量率放射線連続照射施設や先端分子生物科学研究センターを備えている。貴重な研究成果も多数報告されている。これに対し国際放射生態学連合から最高賞が贈られた。「実証研究」が当研究所の売りである。

環境研史上最強の現理事長を支え、更なる発展を期待する。